
バイトラヴバトル

REN

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バイトラヴバトル

【Nコード】

N3189I

【作者名】

REN

【あらすじ】

バイトに明け暮れる日々。通称のんちゃんの恋の始まり。

ちよっかい出されるのは私が悪い。あんな奴、いい迷惑？でも……。

よくある恋愛物語ですが、初作品として一歩踏み出しました。

これをきっかけにどんどんお話を書きたいです。

1：はじめは（前書き）

はじめまして。

初の作品となります。まだまだですが、とりあえず読んでみてください。

これからもいろんな方の作品を読んだり、読者様の意見を参考にできればと

思いますのでよろしくお願いします。

1：はじめは

今年もまた、暑い季節が始まるうとしている・・・。

「つてか、暑いっ。」

ここは室内、日当たり良好。クーラーは18度の設定で環境問題も無視しまくりの極楽の場所、なんてのは嘘。

ここは室内。室内と言っても部屋ではなく、店内。大きな倉庫がそのままお店になったような店内は鉄板の薄い屋根が暖められ、中にある私達店員はサウナの中にいるのと同じ気分。今日は平日だから足元の扇風機で涼んでいられるけど、休日ともなれば人が倍増。お客が増えれば、熱気が増す。熱気が増せば、店内の温度も上がりイライラもマックスまで高まる。

何でガラス張りにしたんだろう。背中に受ける灼熱の太陽が痛い。昼を過ぎれば、てっぺんから傾きかけた太陽がもろに店内に差し込む。

お店の中がよく見えるようにとガラス張りにされたレジの後ろ側。お陰でお客に見せるわけにはいかないような店員の裏事情まで見えてる。

「ノンちゃん。また袋取るの失敗したの？」

常連のおばあちゃんが外から見えてたよ。と教えてくれた。レジ袋をどうしても上手く取り出せない。つい爪で引っかけて破いてしまっ。

はははっ、と乾いた笑いで流そうとしたけれどおばあちゃんはいつもその袋を使うから、と持っていてくれる。

「ありがとう。おばあちゃん。」

この尋常でない暑さの店内にも、おばあちゃんの気持ちは暖かくて、いつも癒される。

「俺には破れてないので。」

おばあちゃんのお手伝いをしていると、後ろからの声に心臓が跳ね上がった。

振り返ってみると、汗だくの蓮慈れんじが建っていた。じゃなかった、立っていた。

私よりかなり身長の高い蓮慈は、横幅もガツシリとしてるから、本当に建ってるのほうが似合っているような気がする。それに今はエコの時代。敗れてない袋は有料ですけどよろしですかあ。

「荷物の搬入でこんなだぜ。俺今日2回も着替えたつてのに・・・
まただよ。」

1リットル以上もある大きな炭酸飲料のペットボトルと菓子パンを袋に詰めながら、ブツブツを文句を言ってる。

でっかい体で何小言言ってるんだか。

「お仕事ご苦労様です。」

とりあえず当たり障りのない言葉を返してみた。でも、不満だったらしく手招きで私の耳元に口を近づけると

「他人行儀だな。今夜行くから着替えさせて。」

・・・!!!!!!

家にあなただの着替えはありませんっ。

2：アクシデント

私と蓮慈の知り合うきっかけになったのは商品の搬入。

レジだけではなく、長くバイトをしていると仕入れや搬入、在庫の管理なんかも任されてしまう。

ようは、いいように使われてるっただけ。

頼まれると断れない性格の私はそのうってつけ役。特にいやでもないし、最初は未知の世界に足を踏み入れる瞬間みたいにドキドキしてた。

そんなある日。

トラックから荷物を降ろし終え、最終確認。バッチリと思ってトラックを見ると運転手がいない。後ろをみると荷台のドアも開けっぱなし。

「無用心だなあ。」

私はトラックの扉を閉めると、多分休憩室にいらるであろう運転手のおっちゃんのとこまで走った。

「荷台の扉閉めといたから。」

タバコと缶コーヒを持って店員と立ち話をしていたおっちゃんに声をかけると、うい、と片手を上げて答えた。

ついでだと私にもジュースをご馳走してくれて、その場で5分ほど談笑。その後トラックまで戻ってみると人だかりができていた。店長がトラックの後ろでオロオロしてる。

「どっしたの？」

近くに居た子に聞いてみると、どうやらトラックから物音がするらしい。誰かが閉じ込められているとか……。
まさかっ。おっちゃん人さらいでもしてきたの？

ワシのトラックじゃあ、とドカドカ歩いて近づく。確かに物音と人の声。みんなにさがつちよれ。と人払いをすると、思いつき扉を開いた。すると、おおきな物体が倒れこんできた。

「はあ、はあ、死ぬかと思っただあ。」

その汗だくのびしょぬれの物体こそが蓮慈だった。

いつもは私とおっちゃんの2人で荷物を降ろすんだけど、合い積みしてきた荷物があつたらしく、その担当が蓮慈だった。しかも灼熱の太陽の下に停めてあつたトラックの中はドンドン温度が上がってみたい。

「ごめんっ、私が中確認しないで扉締めちゃったから閉じ込められたんだよね。」

横たわる蓮慈に申し訳なくて持っていたジュースを差し出した。
引っ手繰るようにジュースを奪った蓮慈は一気飲みしたのはよかつたけれど、炭酸飲料だったので喉でつかえたのか思いつきむせて噴出した。

そう、私の顔面に向かって……。

その後は喧嘩に発展。私がサイテーと叫べば、誰が閉じ込めたんだと蓮慈が呆れる。ギャーギャー言い合っているうちに、周りにいた人だかりもなくなり、おっちゃんまでもが、後は若いモンで……

。なんて意味不明なこと言いながら去っていった。

「とりあえず、帰るか。」

落ち着いたところで、蓮慈が言うもんだから、またイライラが。

「誰のせいで帰ることになったと思ってんのよ。」

顔面はねばっこいし、白いTシャツは炭酸飲料の色で変色しちやつてる。見かねた店長が今日はもう上がっていいって。

蓮慈は立ち上がるとパンパンと膝についた埃を払い、からのペットボトルを私に渡した。

「ついでだし、俺もシャワーかして。」

「なっ・・何のついでよっ。私のせいで閉じ込められたからって、1人暮らしの女の家に上がりこむなんて、とんだ狼男じゃない。」

一歩後ずさって大声で叫んだ。

冗談じゃない。なんで家に男を入れなきゃいけないの。確かに私が悪いことしたと思うけどさ、だからって何でシャワー貸さなきゃならないわけ？意味わかんない。

「俺にこんな格好で帰れって？こんな汗だくで？誰のせいで汗だくになったと思ってるの？サウナに閉じ込めれたからだぜ？それとこのジュースの匂い。汗とミックスしてすごい匂いしてんだらうなあ。電車だったら他の人に迷惑だらうなあ、お前のせいで俺が白い目で見られるんだらうなあ。」

そりゃ確かにそうだ。こんな奴が乗ってきた日にゃあ車内が地獄と化してしまうかも。

「それに、罪のない人たちを巻き込むのか？」

・・・敗北決定。

結局、バイトの近くに借りていたアパートまで蓮慈を連れて行った。

蓮慈に先にシャワーを使わせて、帰ったのを確認してからシャワーを使った。

使ったタオルはきちんとたたんで置いてあるし意外といい奴かも。なんて思っていたけれど、そのタオルをどかすと・・・

「なっ、何よこれえ〜!!!」

そこには無造作に脱ぎ捨てられた蓮治のTシャツと、ひょう柄のボクサーパンツらしきものがおいてあった。

しかも、ピンク。ぴんくってどうなのよ。人に見せられるようなパンツはいてよね!!!

次の日、その怪しい物体をスーパーを袋につめて奴の前に突き出してやった。蓮治は驚いたものの、子供のような笑顔でと笑うとサンキュッ!と袋を受け取った。

一言言っただけでやめたかったはずなのに。

着替え持つてるじゃん。とか、忘れてくなっ。とか、悪趣味っ。とか。

でも言葉が出てこない。

そんな笑顔見せないでよ。あまりのギャップに一瞬胸がキュンとしちゃったじゃない。

3：女子禁制？

そんなこんなで2週間が経ち、夏も本番真っ盛りを迎えようとしていた。

そう、恐怖の夏休み。

この時期になると、子供やお母さんたちが昼間っから店にやってくる。店内の気温も一気にあがり、タオルが欠かせなくなってくる。蓮治もここ最近、昼間は店に顔を出さない。だでさえ汗っかきなのに、人の多さと店内のサウナ状態に更に止まらなくなるからだとか……。

後から聞いた話だと、トラックに閉じ込められなくても尋常じゃない汗をかく蓮治はいつも着替えなんかをロッカーに大量に持っているらしい。

しかも、バイクで通ってるから、電車なんか乗ってないって……
ってことは、私はまんまとはめられて家へ上げたってことじゃない。
悔しい……。

「よくも騙してくれたわね。まったく、新陳代謝どんだけいいのよ。」

嫌味たつぷりにそう言っただけで、電車だったらって例えを出しただけ。と俺は悪くない発言。

しかも、汗をかくのは若い証拠、ああ、若いってすばらしいね。と流されてしまった。3つしか変わらないくせにっ。ふんっっ!!

休憩にもなるとバックヤードの休憩室には行かず、その途中にある例の事件のあった荷物搬入口付近で休憩をとることが多くなった。シャッターが開いていて風通しもいいし、コンクリートが気持ち

よくて思わず寝転がってしまいたくなる。つてか、寝転がってる。
今日もゴロンと仰向けに寝転がると、大の字に体を伸ばす。そよ
風が気持ちよくて、目を閉じる。

いつのまにか寝てしまったらしい。

顔につめたいものを感じる。しかもちょうど眉間のあたり。顔を
振っても、振っても追いかけてくるように眉間に当たる。なんだろ
う。

うつすらと目を開けると、涙を瞳いっぱい浮かべた小さな男の
子だった。ゆるゆると口を開いたかと思うと、

「ママァ・・・。」

違います。

私はママじゃありませんから。

急いで起き上がりあたりを見回すけど、ここはバックヤード。

普段からお客さんが入ることなんてまずありえない。でも、この
子はここにいる。

まったく親は何やってんだか。

「どうしたの？ここは入っちゃダメだって書いてなかった？どうや
って来たの？」

極力怖がらせないようにと、視線をあわせ、それなりのスマイル
で聞いてみた。すると男の子は私の手を引き、入ってきたらしい入
口に案内する。

いくつかあるバックヤードへの扉のうち連れてこられたのは、つ
い最近扉が壊れて営業時間内は開けっ放しにしてある扉。

のスケベッ!!」

「ビシィ〜ッ、と指を反対側の男子トイレへ指した……はずだっだのに。」

「あれ?おかしい。反対側の扉に見えるのはニコニコ顔の女の子。男子トイレには帽子を被った男の子が描かれていたはずなのに。」

「お前が、スケベだよ。ここ男子トイレだけど?」

「えっっ?振り返ると、ずらりと並ぶ男子用のトイレ。」

「ああ、思い出した。トイレに入る瞬間この子が僕はアッチ!と男子トイレを指差したんだ。迷ってる暇もないし勢いでそのまま私まで入っちゃったんだ。」

「そっかあ。思い出した。こっちが男子トイレだったねえ、うん、スッキリ。」

「何がスッキリだよ。俺だってスッキリしてえよ、てっかお前は男だったのかよ。」

「かなり考え込んでいたのか、蓮治はもう我慢できないらしく、乱暴に私をどけるとトイレの前に立った。」

「なっ、女の子に向かって何よその態度はっ。ムツと睨みつけていると、蓮治の口から大きなため息が出る。」

「お前さあ、見られてたら出るものも出ないし、出すものもだせないでしょ?」

「何言ってるの?と口を開きかけたとき、コレコレと蓮治が人差し指で自分のズボンの指す。」

丁度、股間の辺り・・・と思った瞬間、一瞬にして顔が沸騰したかと思うくらい熱くなった。私は子供を抱えると猛ダッシュでその場を去った。

4：井戸端トーク

夏休みも半ばに入り、休みの間だけ。といったバイトの子たちもやつと慣れてきたらしく、気軽に声をかけてもらえるようになってきた。そのうなると始まるのが恋バナ。

恋愛にまつたく縁の無かった私には無縁の話。だけでも、人の話は気になるもの。

バイト先で知り合った惣菜係りのだれそれ君だとか、飲み会でアドレス交換しただれさんだとか。

私は話聞いているだけだけど、案外楽しいんだよね。

「ところで、ノンさんって（みんながノンちゃんって呼ぶから、新人の子はさん付けなんだよね。で、ノンさんで定着しちゃったのです。）彼氏いないんですか？」

いつも、相槌打って聞いているだけの私に話が振られたっ！！

一瞬、何のことかわからなかったけど、私の話？と自分を指差すと、そこにいた3名のギャル達がウンウンと首を縦に振った。

「いない、いない。ってか出会いもないし。自分のことで手一杯だよ。」

自分で言うのもなんだけど、言葉に出すとかなりへこむ。

はあ、と小さくため息をついた。

「何言っちゃってるんですかあ。みんなから聞いてますよお。搬入の蓮慈さんとかかなり仲良しだって。みんな蓮慈さんはノンさんのものだから手が出せない、って悔しがってましたもん。」

他2名もウンウンと頷く。

なんでこの場面で蓮治が出てくるのか不思議でしようがないのは私だけみたい。

「知ってるんですからあ。なんか、トラックの鍵閉めて中でイチヤイチヤしてたとかあ。ノンさんの家に蓮慈さんが入り浸ってて、着替えまで置いてあるとかあ。トイレの中でイイコトしてたとかあ。」

おうおうおう。それは〜！！つい最近あったワースト3じゃあないか。

「なんで知ってんの？」

咄嗟に出た言葉がコレだった。

あ、これじゃまるで、その通りです。って言ってるようなもんじやない。

あわてて、違うの。と口を開きかけると

「やっぱり事実なんですなあ。なんだあ、ノンさんラブラブじゃないですか。羨ましいなあ。蓮慈さん超かっこいいですもんね。でも気をつけてくださいよお？かなり狙ってる子いるんですから。人の男横取りするのなんて平気な女たくさんいますからねえ。特に自分に自身のある奴とか。」

クツと顎で指した先には、夏休み入ってさらに茶色くなりました。って感じの毛先クルルンパーマにぱっちりメイクの真っ黒お目々びっしり睫毛。露出度高めの洋服。

「彼女。楓って言うんですけど、すでにこの店でも3人の被害者がでてますからね。」

被害者ってのは、付き合って2・3日でポイツされちゃってるメ
ンズのこと。

「次に狙ってるのが蓮慈さんらしいですよ。最初っから目えつけ
てるらしいんですけどなかなか落ちないから他のから手つけちゃっ
たみたいですけどねえ。」

へえ。蓮慈って意外ともてるんだねえ。なんてノンきに考えなが
らぼんやりしていると、その楓ちゃんが私の目の前に立った。どうも、
このぼんやりした視線の先にいたのが楓ちゃん、何見てんのよ。
みたいに突っ立てた。

「ノンさん？ですよね。蓮慈と仲いいらしいですけど、付き合っ
てる訳じゃないですよね。」

上から物申す。って感じで見下ろされてちょっとびびっちゃった。
すぐには言葉が出てこなくて、その間に眼光は強くなるし……。
怖いよ、楓ちゃん。

「はい。付き合ってます。」

とりあえず、聞きたいであろう結果を完結に述べてあげた。

だって怖いんだもん。そのアイライナーで真っ黒のどこまでが目
だかわかんないような目で睨まれるのが。化粧落としちゃうと絶対
別人だ。

ジッと、楓ちゃんは私の目を睨みつけてる。ホント怖いからカン
ベンして……。

あと1秒でも睨まれてたら、こっちから目を逸らしていたとこだ

ったけど、楓ちゃんのほうからニッコリと笑顔を見せた。
と思う。

だって、目の周りが黒いから笑ってるんだか何なんだかわかんないんだもん。唯一解ったのは、口の両端が上がってこと。イコール、笑った。でしょ？

「なあ〜んだあ。やっぱりそうじゃあ〜ん。かえでえ〜そうじゃないかと思っただんですけど〜なんかあ〜、他の人たちがあ、付き合ってるって言うしい〜一応確認しとかないとお〜とおもってえ。違っただったら蓮慈のことイロイロ聞いてもいいですかあ？」

なんだあ〜そつかあ〜、勘違いさせちゃってごめんねえかえでちいん。。。。つて、さっきとまるつきりしゃべり方違っんですけど。。。

あまりの衝撃にどんな顔してたかわかんないけど、できる限りの笑顔を自分では向けたつもり。久しぶりの休憩室でまさかこんな大事件に巻き込まれようとは思いましなかった。楓ちゃんが他の子に報告に言ってる間にそそくさと退場させてもらった。

しばらく。いや、この夏休み期間が終わるまでは、この休憩室に近寄らないようにしよう。とりあえず、捕まらないように。どこか遠くへ。。。。

5：突然に・・・

あの、楓二重面相事件以来、休憩室には行っていない。バイトの日は朝一でシフトを確認し、近くのレジじゃないか。休憩はかぶつてないか。と細かく確認。一つでも要素があると、できるだけ忙しく動いてみたり、捕まる前に逃げたりした。

少しでもスキがあると遠くからでも「ノンちゃんせんぱあ〜い！！」と、大声で叫ぶのだ。一斉にお客さんの目が私に向けられたこともあったなあ。はあ・・・。

「疲れたあ。」

スーパーの裏にある従業員専用駐車場の一番奥。その角を曲がってすぐに木が立っている。かなり大きいんだけど、その周りだけが芝になっていて、休憩するには持って来いな場所。

ここだったら誰にも邪魔されずに休憩できる。

暑い外にわざわざ休憩に来る人なんていないだろうし。

店内に（資材置き場でも）いるかぎり、楓ちゃんが探してた。とか、楓ちゃんに聞いたってって言われたんだけど。とか、とにかく楓ちゃんの手下達でいっぱい。

正直最近うんざりしてきた。

木の下によつこらしよ。と座ると、持ってきたお茶を入れるかぎり喉の奥へ流し込んだ。

「でも、なんでだろう。」

つい、口に出してしまった独り言。一昔前のお笑い芸人じゃないけど、でも、つい思っちゃう。

なんで、逃げてるんだろう。

付き合ってるじゃない。って、はっきり言ったんだし、蓮慈の情報くらい売ってやってもいいくらいじゃない。ってか、知ってるってほどの情報もないんだけど。楓ちゃんが聞いて納得するなら話してあげればいいことなんだろうけど。

なんでこんなに話したくないんだろう。

もちろん、なんで蓮慈のことに時間取れなくちゃ。と思うけど、なんで私に聞くの。と思うけど。それよりなにより、自分の心につかかてるのは、

私だけが知ってる蓮慈のこと教えたくない。

まあ、確かに。そうだよ、自分だけが知ってる蓮慈の事なんてちよつとよ。片手くらいしかない。と思うし。

トラックの事だって……。たくさんの目撃者がいたけど。パンツの事だって……。もしかしたらバイト仲間には話してるかもだけど。

トイレの事件だって……。みんなに変な形で知れ渡ってるけど。

。。。。

こう考えると私だけが知ってる蓮慈っていないんじゃないか。。。。

「あら？意外と私の勘違いかあ？」

教えられるほどの蓮慈を知らないから教えられなかったんだ。

脱力して芝生の上に倒れこんだ。下から見上げる木の葉の間からキラキラ眩しいくらいの太陽が時々私の目を掠める。

「わたしって馬鹿。最悪。もう、なんでだろう。」

眩しさをさえぎるように目を瞑り、手で覆う。その隙間から水が流れ出たのを感じてはいたものの、それがなんなのか確認したくなかった。

「何泣いてんの？」

突然上から降ってきた声に、一瞬からだビクツとなった。

この声は知っている。今まさに聞きたくない声。

次に視界をさえぎっていた腕をむりやり退けられ、一瞬瞑った瞼に光が当たり、また暗くなった。

今度は自分の腕じゃない。

「こんなところで休憩？暑くないの？」

ものすんごく近くからの声。顔にかかる吐息に、私の目の前には蓮慈の顔があるんだと思い知らされた。

「何で、こんなところで泣きながら休憩してんの？誰かにいじめられた？」

んもう。何なのよさつきから。質問攻めにしないでよ。

ってか、アンタのせいでこんなことになってんだから。そうよ、

蓮慈のせいじゃん。

なんで、こんなに頭つかって悩まなきゃいけないのよ。そうだ。

楓ちゃんには蓮慈から直接言ってもらおう。

決心がついた私は瞑っていた目を勢いよく開けた。

と、同時に私の唇に暖かいものが降りてきた。まるで、スローモーションをみるように、ゆっくりと。

逃げることも、避けることもできなかった。むしろ、待っていたかのように……いや、違う。反射的に目を瞑ってしまった。

ゆっくりと離れていく蓮慈の唇。そのあとゆっくりと開かれた蓮慈の瞳。私はすでに目を開いていて、その様子をじつくりと眺めていた。

目を開いた蓮慈は、少し驚いた顔で見下ろした後、ニツコリと笑って一言。

「王子様のキスでお姫様が目を覚ました。」

6：真実は怒涛の中に？

「だっ！誰が王子じゃあ。ってか、何してくれてんの？寝込みを襲うなんて男して恥ずかしくないわけっ？」

「だって起きてたでしょ？」

「だってじゃなああいつ！！相手の許可なくキスするのは強姦と一緒でしょうがあ！そっ、それに私のファースト・・・」

「えっ？もしかして初めてっっ???!」

「うんなわけないじゃない。馬鹿にしないでよっつ。」

はあ、はあ。息をきらせながら捲くし立てるように押し問答をした。最後の質問の後、蓮慈はものすんごくニマニマした顔で私を見てる。

バレたか？私が初めてなのっ。

どうにか話題をそらせるために思いつく限りを話し始めた。それこそマシガンのように。

「だいたい。私がこんなところで休憩してるのだって、アンタが悪いんだからね。暑いのに外でだなんて。まあ、ここは気に入ってるからいいけど。それより、こんなこと言うの嫌だけど、楓ちゃんが蓮慈の情報を流せて言うのよ。そんなこと言われたって私は蓮慈のこと何にも知らないのよ。みんなと同じくらいのことしか・・・、ってか蓮慈のことなんて一緒に働いてるほかの人の方がよっぽど知ってるんじゃない？なのになんで私に聞くのよ。あんたといろいろあったやつ、ほら、あのトラック事件とか、トイレ事件とか。あれ

が変な風に噂になっただけなのが多分原因だろうけど。それ以外の蓮慈なんて、私知らないんだから。だから、あんたが直接楓ちゃんに言っただけよ。

そうよ。蓮慈、アンタが楓ちゃんと話合いしてよ。多分休憩室にいるだろうから。そうして。ところで何でここにいるの？」

そつだ。なんで蓮慈がここにいるんだろう。汗っかきの男子には外で、太陽で、真夏日で。とっても休憩にもってこいの環境じゃないと思うんだけど。

「俺もここでよく休憩してんの。」

ニマニマ顔は私のマシンガントーク中に消え、嫌味にニヤリと笑いながら芝の上に腰を下ろした。

「で、さっきの話だけど。結論から言っただけ、俺は、その楓ちゃんとやらとはすでに話した。好きな子がいますって。たしか・・・夏休み入ってすぐかな？」

そつつか。蓮慈好きな子いるんだ。じゃあ、しょうがないね。と思いつつもいつの間にか立ち上がって捲くし立てていた自分も蓮慈の横に座り直す。チクチクと胸が痛むのはさっきの言葉をきいてから。

好きな子がいるのか。バイト初めてすでに何週間か過ぎてるのに、まだ諦めてないなんて。楓ちゃんも意外と一途かあ？・

「でも、狙った獲物は必ず落とす。らしいから、まだ裏ではみんなに何でも聞いてるみたいだけどな。」

・・・ハンターだったのね。

ふぐん、って曖昧に相槌うちながら胸のチクチクが気になってし
ようがない。

「それから、変な風に広まってると言う噂だけど、あれは俺も知
ってる。真意を聞いてきた奴もいたけど、俺否定しなかったし。だ
から余計すごい広まり方してんだなあ、きつと。」

ふぐん、ってええええええ？なんですとおくく

「なんで否定しないのよつ、まったく違うじゃん。私なんて、蓮
慈さんには手だしませんから。とか言われて、彼女扱いされたんだ
から。」

「嫌なの？」

間髪いれずに返された言葉にどう答えていいかもわからず、視線
だけはあさつての方向へ向ける。

「嫌なの・・・って、だって、好きな子いるんでしょ？」

ついさつき知った新事実。そして、その新事実によって解ってし
まった自分の気持ち。

2人で空を見上げてた。

蓮慈はニマニマと天使とも悪魔とも呼べるような笑顔で。

一方私は、無表情。頭がショートしている。顔面に虫が止まった
のも気づけなかった。

「痛つつ。」

蓮慈におでこを叩かれて現実世界へ舞い戻れたらしい。

「悪い。虫が止まったもんだから、つい」

つい。で女の顔叩くんじやないわい。まったく、はあく。

「それで、頭の整理はついたのかな？ノンちゃん。」

「まだ。て言うかおさらいしてもいいかなあ。」

そりゃいい考えだ。と言わんばかりの頷きに、ひとつ深呼吸すると口を開いた。

「私と蓮慈のたくさんの珍事件を広めたのは蓮慈だったのね？」

「いや、正しくは否定しなかったら、広まっただけのこと。」

「トラックの事件は、偶然なのね？」

「それは正解。マジ驚いたよ。荷台の中で何してたとか言うのは勝手に広まってたんだぜ？まあ、否定はしなかったけど。」

「私の家に着替えがあったり入り浸ってるって噂は？」

「一回行ったことあるしな、それも特に否定しなかった。」

「トイレでイチャイチャしてるとかっていう話は？」

「たまたま俺達が言い合いしてるのを見たって奴がいてさ、何して

た、何してた？ってうるさいから、想像におまかせしますって言うだけ。」

「つまり、肯定も否定もせずってわけね？」

「そうなるな。」

「・・・つまりは・・・つまりは・・・
あんたが一番の原因なんじゃないっつ。」

真横にいる蓮慈に向かってでかい声張り上げた。当の蓮慈は涼しい顔してそうかなあ・・・なんて笑ってる。

「なんで否定しなかったのよ。ってかどれも半分以上はまったく違うじゃない。」

「だって俺、ノンちゃん好きだもん。こうしとけば他の奴が寄り付かないっしょ？」

おう。なんて爆弾発言。だもん、とかしょ？とか言われても。

「だもん、って何よ。まるで当たり前みたいに言ってるけど、私そんなこと一度も聞いたことないんだから。」

「今言っただじゃん。」

「今じゃおそおお〜い。もっと早かったらこんなに悩まなくてすんだのに。」

しまった。つい熱が入りすぎて余計なことまで言っちゃったよ。聞き逃さなかった蓮慈の目が怪しく光る。

7：あまのじゃく

「何をお悩みになってたのかな？」

「ちょっとしたことです。まったくたいしたことじゃあ、ありやせん。」

蓮慈の手が私の顎を捕らえると、クツと動かした。蓮慈と私の距離およそ5センチ。

「たいしたことじゃないのに悩んでたわけ？」

今度は頭の後ろに手が回る。距離は4センチ。

「いやあくなんていうか、最近暑いからさ。頭もポーツとしちゃうっていうか。」

「俺は好きって言ったじゃん。ノンちゃんの気持ちは？」

距離、3センチ。

「またまたあ、冗談でしょ？だって蓮慈もてるじゃん。現にたくさんの子から猛アピール受けてるし？私なんて、ただのどこにでもいる女だし。年増の女より若い子の方がピッチピチで食べごろだよ。」

「それ、本気で言ってるの？」

グツと距離が近くなる。おでことおでこがくっついてる。鼻だってくっついてる。きつと汗で油ぎってるのに。

自分の気持ちにはもうとつくに気が付いてる。

素直なら正直な気持ち、すぐにでも口にしちゃうのに。天邪鬼な自分が邪魔をして口から出ないように抑えてる。蓮慈の気持ちは痛いほど伝わってる。目が嘘じゃないって物語ってる。涙が出そう。ううん、現に頬を伝う暖かいものは涙だ。

ちゃんと言わないと。きちんと言わないと。本当に嫌われちゃう。それなのに、言葉が出てこない。もう少し勇気があれば……。

「乃夢。」

「好……!?!?」

流れた涙と一緒に出た私の言葉は、蓮慈の唇によって一瞬にして消えてしまった。

乃夢“のむ”ってのは私の本当の名前。彼が私の名前をきちんと呼んでくれたからなのか、私の中の天邪鬼達は一瞬にして消えてしまった。そのせいで、出掛かっていた言葉が口から流れるように零れた。

「……つもう、長いよっ!」

ポカポカと蓮慈の頭を叩いてやっと唇を離してくれた。あやうく死ぬとこだったじゃない。

「わりい。つい、嬉しくて。」

「てか、あんた私の答えちゃんと聞いたの?」

最後まで言わせてもらえなかった言葉の欠片はまだ体の中に残っている。

「口開いたら塞いでやるとしか思ってなかったし、どっちでもチュ

ウはしてたんだけどさ、でもちゃんと聞いたよ。最初の文字さえ判れば俺わかつちゃうもん。」

あっそ。

「好きじゃないって答えだったとしても?」

「えっっ???!」

蓮慈の表情が一瞬にして固まる。ふふふっ、今までの仕返しにしてばらく放置しといてやるのかな。

「乃夢?」

鳥肌が立つちゃうくらいゾクゾクする。名前を呼ばれただけなのに。

「嘘だよ。いつからかなあ、蓮慈のこと好きになってたみたい。」

まだ顔を見て上手く言えないから、俯いたまま思ったことを口にする。蓮慈が呼ぶ私の名前は魔法のように私の心を素直をにさせる。クイツ私の顔を蓮慈に向かせると、あの子供のような笑顔を見せるとそつと耳に囁く。

「知ってたよ。俺、いつも乃夢のこと見てたから。」

抱きしめられたらまた泣いちゃう。こんな弱い私じゃないのに。いつも反抗的で、蓮慈にはけんか腰なのが私なのに。

そのあと蓮慈は、私の思ったことがまるで伝わってるみたいに背中を擦りながら、俺の知ってるノンちゃんはいつもツンケンしてん

のに、俺しか知らない乃夢は泣き虫で守ってやりたくなくなるよ。だっ
てさ。

8：怒りの捜索

ああ、さっきまでの甘い時間はなんだったんだろう。

確か、すごいドキドキして女の子してて、恋する乙女だったのに。

半分気分は上の空。慣れてしまっているレジ打ちはこんな私にも
どうやらできるらしく、手は機械的に動いている。

あの後。

ラブラブムード全開だった私たちは自分達が今どんな状況にいる
かまったく忘れてしまっていた。

そう、今は超多忙な夏休み期間の昼間。しかも休日。つまりは、お
店は超込み合っている。

休憩から戻らない私たちに、何かあったんじゃないかと不安にな
った店長は必死に探していたらしい。前の事もあるから、裏に停ま
っていたトラックの荷台も隅から隅まで探したって。最後の最後に
駐車場を探したけどいなくて、がっくりしてたところに、蓮慈の長
い足が建物の影から見えていて、もしかして倒れてるんじゃない
かと走り寄ると……。

「ほんつと、バツカじゃないの??」

営業時間が終わった私たちは今店長の前に立たされている。

走り寄った先には抱き合って眠る私たち。

蓮慈の足を見つけた店長の手には119番をプッシュし、後は通
話ボタンを押すだけになっていて携帯電話が握られていた。必死に
探していた私たちを見つけた安堵感と怒りから押ししてしまったボタ
ンに気づかずに私たちに向かって叫んだ。

「このばかたれどもがああ〜!。」

9：バイトラヴバトル

もちろん、消防署の方からは嚴重注意をされ、従業員中に聞きまわっていた店長のお陰で噂もすぐに広まり、私たちはあつという間に注目的になった。

小さくなっている私の横で、蓮慈はさほど反省をしていない様子で平然と立っている。ちよっと、ちよっとおお。もう少し反省の色見せたらどうなのよお。クビにされちゃうよ。蓮慈ってばあ。

こつそりわき腹を小突いたけど、何も感じないのかまったくの無視。興味本位に事務所の中で様子を伺っていた人たちが、動きのない私たちに飽きてやっとなり帰っていった頃。

「悪かったと思ってるよ、でも俺嬉しくて。やっと思いが通じたんだよ。いつも俺の話聞いてて俺がどれだけ乃夢のこと好きか知ってるだろ？」

おつどろきい！なぜにため口？

うちの店長は女性で一見穏やかそうだけど、かなり厳しい。忙しくなればなるほど口も悪くなる。その辺にいるおっさんとなんら変わりなくらい。故郷の人はみんなそんな話し方だから、本人としては素が出るだけ。と言ってるけど・・・

こつちとしてはかなりおっかない。

「だからってこのクソ忙しいときにイチヤイチャしてんじゃないわよ。蓮慈だってわかってんでしょ。わざわざあんたのわがまま聞いて、ノンちゃんと一緒にの休憩時間作ってあげたんだから、私の気分を悪くするようなことしてんじゃないわよ。」

うう。怖い。

チラリと覗いた蓮慈の横顔は意外と涼しげで、私の方に視線を向けるとニツコリと微笑んだ。

「わかったよ。来週は少し多めに入るからカンベンしてよ。それよりも俺、乃夢と付き合うことにしたから。いいだろ？乃夢もいいよな？だからまた、休憩とか合うようにしっかりシフト組んでくれよ？バイトしてる身だとなかなか会えないし。休憩しかゆっくり話もできないだろうからさ。頼むよ、店長。」

なつ、なんてわがままなお願い。しかもやっぱりため口だし……。

店長は、大げさなくらい大きくため息をつく。シフト表を取り出した。前々から店長に言っただのだから。私たちの目の前に突き出したシフト表はもの見事に同じ時間帯に休憩が入っている。出来る限り上がる時間も同じ。

いや、店長。このシフトは誰が見てもこいつら付き合ってるな風？仕組みました風ですよ。バレバレですよ。

「さすが店長さま。感謝します。」

蓮慈は嬉しそうに、店長の肩なんか揉んでるし。私は何も言えないままさつきから気になっていることを思い切って聞いてみた。

「店長と蓮慈はお知り合いなんですか？」

浮かれていた蓮慈と、仕事はまじめにするのよ。と文句を言いながらも笑顔で店長は同時に私に視線を向ける。

あの、私変なこといいました？ため口きいたり、シフトいじくったりかなりの親しみを感じるの私だけなんですか？

「ノンちゃん。この際だから言っとくわね。この子はかなり軽いとか、遊んでるとか、締りが無いとか、とにかくやらんばらんだとか言われてるけどね。そんなことないのよ。いつもノンちゃんの話しを面白おかしくしてくれるし、自分の気持ちを恥ずかしいくらい私にさらけ出してるし。」

店長。かなりつつこみどころ満載なんですけど、とりあえず黙って聞きます。

「でもね、本当に好きみたいなの。今まで女の子の話こんなにしてくれたことなかったもの。だからね、仲良くしてあげて。これは母親として。でも、仕事はきっちりしないとダメよ。出来のいい子たちだから心配はしてないけど、これは店長としてよ。と、言うわけで、公私ともに仲良くしましょうね。とりあえず今は仕事だからまじめに怒られてね？いいわね？」

「はっ、はいっ。」

いいわね？と言われて、ついはいと返事してしまったけれど、一つ引つかかることがあったんだけど……。

「あの……。お話はわかったのですが、店長と蓮慈はもしかして……。親子ですか？」

「だから、俺のお袋。知らなかったの？ここに働いてる人間なら誰しもが知ってると思うっていたけど。やっぱ乃夢はおもしれえよ。ビックリ箱並みだよ。」

ビックリ箱っておもしろの？でも、でも、親子ってことはつまり

そう、今日は帰りたい。そして、今日の出来事を整理したい。でもきつと、頭いっぱいだし無理だろうなあ。こういうときは寝るに限る。

そそくさと、その場を離れて帰宅の準備を済ませると、外へ出て空を仰ぐ。

大きく息を吸い込んでゆっくり吐く。

「ん、よしっ。明日も頑張るぞおお〜!!」

店内の事務所からはギャーギャーと賑わいが聞こえてるけれど、まったくの無視でさっさと帰ろう。これから嫌というほど付き合っていくつもりの子だし。こんな恋愛の始まり方もアリなんだろうなあ。

今日はもうカンベンだけど。

「それじゃあ、お疲れ様でえ〜す。」

聞こえないように、挨拶をした。

9：バイトラヴバトル（後書き）

最後まで読んでくださった方。ありがとうございます。

どう終わっていいのか悩んで、困って終わらせたって感じになっちゃいました（汗）まだまだ勉強してきます。

次回も頑張ります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3189i/>

バイトラヴバトル

2010年10月18日05時12分発行